

# 経済学の「エコノミー」

—— 古典派／新古典派経済学における

「経済」概念についての哲学的考察 ——

荒 谷 大 輔\*

## 要 約

本論は、「エコノミー」概念をめぐる思想史的な研究の成果を踏まえた上で、経済学が問題にしている「経済」の意味を明らかにすることを目的とする。アダム・スミスの「分業」概念を基礎に展開される古典派経済学と「限界革命」以後の近代経済学では、前提としている「経済」にずれがみられるが、自らが研究の対象とする「経済」という事柄を明確に規定していないという点においては同様であるといえる。経済学者の書いたテキストを分析することを通じて、経済学が前提とする「エコノミー」を明らかにする。

キーワード：経済学，エコノミー論，経済学批判

「エコノミー」という概念は、西洋の思考の伝統において、単に日本語で「経済」と訳しただけでは掬いきれない含意がある。平成 19 年度～平成 21 年度にかけて行われた科学研究費基盤研究(B)「エコノミー概念の倫理思想的研究」の「エコノミー」概念原典資料集に見られるように、「エコノミー」という概念は、ストア派の自然法論やキリスト教の救済論を経てアダム・スミスに至るまで、「自然」および「神」が定めた世界の「摂理」を指し示すものであったのである [cf. kakken, 120ff.]. 『道徳感情論』におけるスミスは、ヒュームの経験主義を意識しつつ、自然神学的な「神」を唯一の原理とする「エコノミー（秩序＝救済）」を、人間たちの社会の自然＝本性に内在する原理として「経験化」しようとした。そこでは、それぞれの個人が「自然の欺瞞」によって「勤勉（industry）」へと導かれることで、全体としての「エコノミー」が、「見えざる手」の機

能によって調和するといわれていたのである<sup>(1)</sup>。こうして世俗化され、「経済学」へと連なっていく「エコノミー」概念の内実とは、しかし、経済学がひとつの「科学」として成立していく過程において、背景に退くことになる。だが、「経済学」が前提とし、それを研究の対象としているはずの「エコノミー」とは、一体どのようなものなのだろうか。本論では、通常の「経済学」においては問われることのないままに止まる「エコノミー」概念の内実を、経済学のテキストに即して検討することで、端的に「経済」と語られることで認識の背景に退けられる事柄の構造を明らかにしていきたい。

## アダム・スミスの「エコノミー」

『国富論』と略して語られるスミスの著作は、正式には、「諸国民の富の自然＝本性と諸々の原因についての研究（An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations）」であっ

2011 年 11 月 28 日受付

\* 江戸川大学 人間心理学科准教授 哲学

だが、スミスの企図が、「富」に関する「自然のエコノミー」の解明であったことは、そのタイトルからも窺い知ることができる<sup>(2)</sup>。そこから「経済学」がはじまったと見なされるスミスの著作において主題となっていたのは、「富」についての「自然＝本性」の探求であったのである。

スミスは、そこで「分業」と「交換」の原理を提示し、自らの利益関心にのみ従って為される個々人の行為が、エコノミー全体の発展へと連なる構造を示すことになる。すなわち、「交換」とは、「すべての人間に共通の性向（propensity）」[Smith: WN, I.ii.2]であり、この「性向」によって人間社会の「分業（division of labour）」が成立するとスミスはいうのである。

この分業は、〔個々の労働の生産性を上げ、時間を節約し、機械化を促進して、産業全体を促進するという〕かくも多くの利点をもつものであるが、もともと、それによって〔社会〕一般の富裕が獲得されることを予見し意図した、誰かの知恵によって生まれてきたものではない。分業というものは、そうした広い範囲の有用性には無頓着な、人間的な自然＝本性のある性向、すなわち、ある物を他の物と取引し、公益し、交換しようとする性向の、緩慢で漸進的ではあるが、必然的な帰結なのである。[Smith: WN, I.iii.1]

人がもし、「自分自身の労働の生産物のうち、自分の消費を越える余剰部分を、彼が必要とするような、他人の労働の生産物の一部と交換できると確信（certainty）」できるとするならば、「すべての人は、特定の職業に専念するように促される」[Smith: WN, I.ii.3]だろう。各人がそれぞれの職業に専門化して特化し、社会全体の生産性を向上させることができるのは、すべての人々が何らかの仕方で、人間はその自然＝本性において「交換」する存在であり、他人の労働の成果を獲得できることを「確信」できているからだといわれるのである。

だが、この「交換」にまつわる「確信」は、ス

ミスの時代にあって、疑い得ない現実であるというよりもむしろ、ひとつの理想として、ありうべき「エコノミー」のを示すものだったと考えられる。実際、スミスは、大きな市場（market）が形成されていない状況においては、分業が制限されることを指摘しており [cf. Smith: WN, I.iii]、反対に、分業が進められることによる「文明化」を期待していた [cf. Smith: WN, III.iv] ののである。スミスによって、「理性（reason）」という人間の能力の必然的な帰結 [Smith: WN, I.ii.2] として意識されていた「交換」の性向は、ひとつの理想的なエコノミーが形成されるために「確信」されなければならないものであった。この「確信」は、以下にみるように、スミスをはじめとする「古典派」の経済学にとって、その中枢において理論を支えるものであったと考えられる。「セーの法則」と呼ばれる古典派経済学の理論は、古典派の人々が思い描く「エコノミー」の理想のうちにはじめて成立するものだったと考えられるのである。

### 古典派経済学の「理想」—— セーの法則 ——

リカードは、『経済学および課税の原理』の序言において、ジャン・バティスト・セーが『経済学』の第一部第十五章で展開した「販路について」の議論を称賛し、スミスを祖とする経済学の体系化が完成に近づいていることを示唆した。「セー氏こそは、大陸の著者の中で、スミスの原理を正當に評価しかつ適用した最初の人、若しくは最初の人々の一人である」といいつつリカードは、特にセーの『経済学』「販路について」を挙げて、それが「若干の非常に重要な原理を含んでおり、私の信じるところでは、この卓越した著者によって初めて説明されたものである」[リカード, 9]と称賛した。こうして、セーよりも一層セーの法則に忠実な経済学者として自身を形成しながら<sup>(3)</sup>リカードは、古典派経済学の「完成者」として、その「エコノミー」の理想的な体系を記述したのである。商人は普通、「『自分の商品を交換することで欲しいものは貨幣（l'argent）であり、他の

商品ではない』という」[Say, 247]。だが、セーによれば、この一般的に見えるこの見解は正しくない。なぜなら、「そもそも、あなたが貨幣を欲するのは何故なのか。あなたの産業＝勤勉 (industrie) に必要な原料、あるいは、あなたの口に糊する食糧を買うためではないだろうか。あなたが必要としているのは貨幣ではなく、生産物であることをよく理解すべきだ」[Say, 247] からである。だとすれば、『「人々の所持する」貨幣が少ないから、物が売れない』というのは、手段を原因と取り違えていることになる」[Say, 247] だろう。物が売れないのはむしろ、他の産業においてその商品を買うに十分な生産が行われていないためであり、他の産業が多くの物を生産するようになれば、自然と販路は開拓されていくはずだとセーはいう。すなわち、「貨幣が少ないから物が売れないというべきではなく、他の生産物が少ないから物が売れないというべきなのだ」[Say, 248] とされるのである。

どんな国でも、生産者の数が多ければ多いほど、販路を見出すことはますます容易となり、売却先は多様となって、その範囲を広げることになる。多くの生産がなされるところに、ひとが唯一それによって購買するところの実体 (substance)、すなわち、価値 (valeur) と呼ぶべきものが創られる。貨幣は、この二重の交換において単に過渡的な役割を担うにすぎず、交換が終わってしまえば、生産物に対する支払いが生産物によってなされたことを人は常に発見するのだ。生産を完了した生産物は、まさにその瞬間に (dès cet instant)、その価値の全額だけ、他の生産物に対する販路を提供するのだ。[Say, 249f.: 強調はすべてセー]

あらゆる物の「生産」は、エコノミーにおける唯一の「実体」である「価値」を創造することにおいて、生産が行われた「その瞬間に」、他の生産物に対する販路を切り開く。「生産は、それ自身によって販路を提供する」というセーの法則は、こうして定式化されるのである。こうした法則が

成立することの前提に、アダム・スミスが「理性の必然的帰結」と見なした「交換の性向」があることは、まずは容易にみてとれよう。セーが思い描く「エコノミー」の体系においては、人が「交換」によって他者の生産物を獲得することは、単にスミスのように「文明化」の目標として設定されるものではなく、エコノミーの体系性を支えるものとして必要不可欠な前提となっている。ひとは、「価値」を生産した「その瞬間に」、エコノミーの交換の体系の中にすでに存在しており、「唯一の実体」を媒介として常に潜在的に他者と関わっている。セーが思い描く「エコノミー」の体系においては、分業と交換による経済社会は前提とされ、そこで生産される物の分配の論理の貫徹を支えるものと見なされているのである。

しかしながら、現実の「経済」的現象が、実際にこうしたセーの法則に従って、生産過多に陥ることがないかといえば、そうではない。様々な産業において生産を活発化させ、産業全体の「総生産量」を拡大するだけで、あらゆる商品が行き着く先を獲得するのであれば、原理的にいって、経済的な不況は、単なる過渡的な市場の摩擦以上のものではないことになるだろう。後にマルクスによって批判され、ケインズによって修正を迫られるセーの法則は、しかし、当時においてすでに後年の批判の根拠とされた過剰生産や不況を知らないわけでは決してなかった。セーの法則は、むしろ、そうした現実の経済の不調を乗り越えるための理想として、設定されるものであったのである。

ド・シスモンディ氏は、私が本章〔販路について〕および第二篇の最初の三章で打ち立てた原則をよく理解しておられないらしく、人が生産過多に陥る可能性を、イギリスが大量の手工業生産物を外国市場にもつことによって例証している。しかし、こうした生産過多の例は、単にイギリスの商品が過剰となっている場所では、いまだ生産が不十分であることを示すにすぎない。もしブラジルで、かの地に送られるイギリス商品を買うに十分な生産が行われれば、イギリスの商品がブラジルで停滞することはないだ

ろう。[Say, 253]

こうしてセーは、現実の生産過多を解決するために、さらなる生産を要求することになる。「[リカードに代表される] イギリスのアダム・スミス学派の人々は、[アダム・スミスが経験に依拠しようとしていたこととは] 反対に、われわれに観察の足場を絶対的に失わせる抽象の中へと飛び込んだ」[Sismondi, 58/82] といいながら、現実における生産過多の現象を指摘したシスモンディに対して、リカードに影響を与え、リカードのフランスへの逆輸入者でもあったセーは、自身の著作の第四版に新たに付した註において、シスモンディの「無理解」を批判した。「生産を無制限に増大させることによってのみ、販路をも無制限に拡大させるものとする教説」[Sismondi, 316/266] を批判し、「生産を漫然と拡張させるのではなく、むしろ、盲目的熱情を抑制するように見守る」[Sismondi, 317/267] ことを政府に要求するシスモンディの議論は、セーにとっては、単に「エコノミー」の体系的な論理に気付かないものとして退けられるのである<sup>(4)</sup>。

実際、生産を増やすことで需要を拡大させるというエコノミーの理想は、セー＝リカードがいうように、人が自分が獲得した「貨幣」を直ちに消費し、他の生産物の購入に充てるとすれば、実際に成立するといえるだろう。様々な生産物は、唯一の実体である「価値」の一形態であり、人は、自らの労働によって創造した「価値」を他の生産物と交換することによって、自ら労働し創造した分の「価値」をそのまま享受することができるはずである。現実の社会においてそれが成立しないのは、貯蓄をして貨幣を死蔵する「守銭奴」がエコノミーの外部をつくるからであり、あるいは単に、円滑になされるべき「交換」が、様々なエコノミー外的な要因によって阻害されているからにほかならない。すべての人々が理想的な仕方ですべて「交換」を行うならば、エコノミー全体は、個々人が自分の利益を求めて産出量を増大させることに応じて発展し続けることになるのである。

リカードは、よく知られるように、エコノミー

に参加し、それを動かしていく動因を「土地所有者」「資本家」「労働者」の三種に分け、三者の間の価値の分配の構造を体系的に記述した。三種の存在者の行動の連関とその論理の細部に立ち入って検討し、いくつかの「原理」をそこから取り出して見せることは、本論の企図から外れる。体系化が施されているリカードのエコノミーの構造を「数学化」することは比較的容易であり、それによって「生産」に準拠した経済のモデルを立てることも、もしそうした作業に何らかの意味がありうるとすれば、可能であるだろう。

しかし、ここでは、いくつかの「公理」をおいた上で引き出される無矛盾的な理論体系を描いてその美しさを眺め、現実もまたそうであるべしと混沌へと立ち向かう経済学者に与するのではなく、むしろ、そこで想定されている「エコノミー」の前提をもう一度確認しておくことにしたい。すなわち、「正当古典派」の経済学の体系的エコノミーにおいては、①人は無条件に交換すると見なされていること、すなわち、人は無条件的に「欲望」を持ち続け、他者が生産したものを享受し、またさらなる「生産」のための原料とすることが仮定されていること、そして、②誰も貨幣それ自体を欲望することはないと見なされていること、である。そして、これらの古典派の前提を問いただすことが、とりまなおさず、経済学におけるいくつかの「革命」を準備したのであった。つまり、①については、いわゆる「限界革命」と呼ばれる経済学の革新が、②については「ケインズ革命」が、それぞれ、「エコノミー」として想定される体系の刷新を導いていったのである。古典派の前提から導かれる「必然的な帰結」として、各国の拡大政策からの「帝国主義」の到来、それでも消化できない過剰生産を抱えた「資本主義」の自己崩壊と「共産主義」の成立を説いたマルクスの「予言」が、文字通りのかたちで現実化しなかったのも、一面においては、経済学内部における改革の成果と見ることもできるだろう。今日の我々が参与するエコノミーの構造を見るためにも、それぞれの経済学の「革命」の内実を、できるだけ簡潔に見ていくことにしよう。



## 近代経済学における限界革命

「交換の喜びはすべての人間に共通しているが、ほかのどんな動物にも見出されないことは確実である」と、この卓越した思想家〔アダム・スミス〕は述べている。

次のような例を考えれば、この問題は完全に解決されるだろう。すなわち、二人の隣接する農夫が、豊作の後に同じ大麦について大量の余剰をもっていて、この大麦を交換するのに少しも障害がないことを仮定すれば、この問題は直ちに明らかとなるのである。この場合二人の農夫は無制限に交換の喜びにひたって、彼らの大麦のたとえば 100 メッツェンズつを、あるいは他の任意の数量を、互いに幾度でも交換することができる。……〔しかし、〕彼らがこうした交換を行うならば、他の経済人からまさにこうした交換の喜びのために狂っているのではないかと言われる危険に陥るだろう。〔Menger: GV, 167〕

「限界革命」と総称される経済学の理論的展開を主導したひとりのメンガーは、アダム・スミスにおいて、人間の本性＝自然に基づいた性向とみなされていた「交換」の概念を批判し、「交換」が行われる条件を、それぞれの主体がもつ「欲望」の上に基礎付け直そうとした。人々が参与するエコノミーにおいて、生産物の「交換」は、無条件的になされるわけではなく、それぞれの経済主体の欲望の度合いに応じてなされることを指摘したのだ。日常的な経験から考えれば、あまりにも当然であるように思われるこうした指摘は、しかし、一八七〇年代まで存在しなかったわけではない。生産物が人々の「欲望」の如何によって交換されないこともあり、商人は常に販路を模索して努力するという「現実」は、例えば、シスモンディのような「異端の経済学者」がつとに指摘していたことでもあったのである。しかし、そのような経験的に当然の指摘が、経済学の「本流」の理論を変革する力を持ち得なかったのは、「経済学」を

理論的純粹性の境位におき、「エコノミー」の体系的維持を重視する姿勢が優勢であったからだと考えられる。経済学が描くエコノミーが、現実との齟齬を顕わにするものであったとしても、「自然学」に準じる人間科学は、人間の本性＝自然に基づいた理想的な構造を示すことで維持された。実際、「交換」を前提とすることで、実体化された「価値」の分配を示す古典派の経済学において、「価値」についての判断を相対化し、「交換」の成否を個々人の「欲望」に委ねることは、経済学者が期待するエコノミーの実現を放棄するに等しいことだといわなければなるまい。それでは、しかし、「経済学」はいかにしてその内部において、アダム・スミスの「発見」による人間の行為の必然的連関を支える前提を、覆すことができたのであろうか。それは、異なる「公理」を設定し、そこから演繹される「エコノミー」の構造を記述することによってであったと考えられる。「人間経済のもっとも本源的な、もっとも基本的な要因の研究、……および人間経済の複雑な現象形態がこのようなもっとも簡単な要素から発展することについての法則の研究」〔Menger: 52〕が、メンガーをして、限界効用説の「発見」に導いたのである。「無条件的な交換」とは異なる人間の自然＝本性を「公理」とし、そこから体系的なエコノミーを記述することで、「経済学」の刷新が図られたのだ。

限界効用説によれば、人々間の交換は端的になされるものではなく、各人が現に所有している物の量によって変化するものであるとされる。ある商品 A の「効用」は、すでに多くの A を所有している人にとっては少なく、A を所有していない人にとっては大きく見積もられる。商品の「効用」が、各人の所有量に対して右肩下がりで変化していくことは、それゆえ、その商品に対する各人固有の関数として描けるはずであろう。限界効用説に数学的な表現を与え、エコノミー全体の一般的な均衡を初めて描いたワルラスは、そのことによって、現代の主流派経済学に連なる理論を形成した。メンガーにおける均衡理論の欠如を積極的に捉えるハイエクなどの解釈もある<sup>(5)</sup>が、

シュンペーターのいうように<sup>(6)</sup>、今日の主流の経済学を直接的に準備したのは、やはりエコノミー全体の一般的均衡を記述するワルラスの理論だったと考えられるのである。

ワルラスの一般均衡理論において、商品 A に対するある人 1 の「効用」( $r_{1A}$ ) は、その人がすでに所有している商品の量 ( $q_{1A}$ ) に応じた右肩下がり関数 ( $\varphi(q_{1A})$ ) として書かれる ( $r_{1A} = \varphi_{1A}(q_{1A})$ )。これは「欲望曲線」と呼ばれ、1 の A に対する「欲望」の度合いが、彼の所持する A の量が増えるにつれて減っていくことを示す。同じように、様々な商品 B, C, D についてもそれぞれの  $\varphi_{1B}(q_{1B})$ ,  $\varphi_{1C}(q_{1C})$ ,  $\varphi_{1D}(q_{1D})$  という関数によって、1 の「欲望」の度合いが記述されるはずである。このとき、1 が A を自分で消費する以上の数、持っていたとして、それを別な商品 B と交換しようとする場面を考えたと、その交換の条件は、A と B の「効用」を足したものの ( $r_{1A} + r_{1B}$ ) が最大になることになるだろう。すなわち、交換に供される A および B の量を微量に変化させて、「効用」の増減が 0 になる点（つまり、導関数 = 0 のとき）が、A についても B についても「満足」しながら 1 が交換に臨むポイントであることになるのである。これを数式で表せば、 $\varphi_{1B}(d_{1B}) = p_{1B/1A} \varphi_{1A}(q_{1A} - o_{1A})$ （但し、 $o_{1A}$  は、交換される A の量、 $d_{1B}$  は交換される B の量、 $p_{1B/1A}$  は、商品 A と商品 B の交換比）となり、これがワルラスの「極大満足式」となる。

こうして、ある人 1 についての、すべての商品 A, B, C, D, ……(有限個:  $m$ ) に対する欲望曲線を描き、それぞれの商品について極大満足式を立てるとすれば、 $m-1$  個の方程式が得られることになるだろう。交換の「尺度」として、ひとつの商品（例えば A）を基準とすることで、 $m$  個の商品に対して  $m-1$  個の極大満足式が得られるのである。このとき、すべての商品に対して交換の尺度となる商品を、ワルラスは、「正金 (*numéraire*)」と呼んでいる<sup>(7)</sup>。実際、すべての商品に対して等しく交換の「尺度」となることが、「貨幣」と呼ばれるものの固有の機能といえよう。この  $m-1$  個の方程式に加えて、交換者 1 がもって

いる商品の「価値」の総量は、交換される前と後で増えたり減ったりしないという条件を定式化して加えれば、正味  $m$  個の方程式が得られ、これを連立して解けば、ある交換者 1 が、どの商品をどのくらい交換するかは、すべて商品の交換の比率の関数であるという結論が得られることになるのである。つまり、「貨幣」という商品を基準にとった場合の商品の比率（すなわち、「価格」）に依存して、人はあるものをどのくらい交換するかを決めるという、ある意味では極めて平凡な答えが、得られることになるのだ。

だが、これをさらにすべての交換者 2, 3, 4, ……(有限:  $n$ ) へと拡張して同様の処理を行い、すべての交換者が交換を終えた直後において、すべての商品について、全体の量は減りもしなければ増えもしないと仮定すれば（生産や消費を含めた交換の式も同様に書くことができるがここでは省略する）、すべての商品の増減を足したものを 0 と見なすことができるであろう。これをすべての商品について定式化すれば、さらに  $m-1$  個ほどの方程式が得られるはずである（ $m$  個の商品のうち、交換の尺度として用いた商品 A については、単なる恒等式になるため）。そして、これをさらに連立して解けば、交換の「比率」として用いていた  $m-1$  個変数 ( $p_{M/A}$ :  $M$  は B 以下の商品) について、すべて「解」が得られることになる。こうして、すべての商品の交換の比率は、各人の各商品の所有の状況と各人の欲望曲線だけに依存して一様に決定されることになるのである。

古典派が想定した「エコノミー」においては、各人の労働によって生産された「価値」は、共通の「実体」として、「交換」を介して各人に分配されると見なされた。社会全体に蓄積された「価値」は、速やかに「交換」されることで、各人の生産に応じて配分されると信じられたのだ。これに対して限界革命後の経済学は、人々が「交換」する条件として、各人がそれぞれに持つ「欲望曲線」があることを規定し、「欲望曲線」を計算に入れた人々の間のエコノミーを描こうとする。人々の間の「交換」は、アダム・スミスがそうしたように、人間の自然＝本性に帰してすませられるも

のではなく、一定の条件のもとに発動するものと考えなければならないとしたのだ。人々の「欲望」を関数として定式化することでワルラスは、それらの「欲望」の絡み合いをひとつのエコノミーとして示すことができたのである。

このような「一般均衡」を想定する経済学においては、古典派において「唯一の実体」と見なされた「価値」は、個々人の「欲望」へと還元されることになる。「社会的富」は、ワルラスによれば、「我々にとって効用があるものであると同時に、量に限度があるかぎりで我々の所有になるもの」[Walras, 21/69]といわれる。ある物が「価値」を持つのは、それが「稀少 (rare)」[*ibid.*]であるために、人々の欲望の対象になるからだと言われている。よく知られるように、「価値」を個々人の欲望へと基礎付けることによって、アダム・スミスが単に指摘だけしていた「稀少価値」の問題が解決されることになる。「価値」は、こうして経済学において非実体化され、「欲望」へと基礎付けられることになるのである。

だが、ここで各人がそれぞれに持つ「欲望」とは、いったいどのようなものなのだろうか。翻って考えるに、アダム・スミスが『道徳感情論』において示した「自然の欺瞞」によるエコノミーは、まさに人々の「欲望」を刺激するものなのであった。「富と名声」が「我々のあらゆる欲望の最終的な対象」として映し出され、人々を「勤勉＝産業 (industry)」へと誘うことが、エコノミーの基礎をなすことをアダム・スミスは示していたのだ。エコノミーにおける「価値」を「欲望」に基礎付け、その絡み合いを示したワルラスの一般均衡理論は、その限りにおいて、アダム・スミスが『道徳感情論』で示した構造に回帰しているということもできるだろう。ワルラスが「科学的に定義されるべき」と見なした「稀少性」とは、すなわち、人々の欲望が集中することによって生じる価値の存在様態であり、欲望の集中による価値を欲望することが、人々をひとつのエコノミーの中におくことになっていると考えることができる。各人の欲望の対象となる「価値」は、ワルラスのエコノミーにおいては、それ自体、人々の欲

望の関数となっているのである。

一般に、経済学における一般均衡理論においては、人々が持つ「欲望曲線」は所与とされ、それがいかに形成されるかが問題にされることはない。エコノミーにおける均衡は、そこに参与する経済主体の欲望が、何らかのかたちですでに与えられているところから計算されるのである。だが、人々の欲望は、必ずしも各人の「自由」に委ねられるような「独立係数」ではなく、ヴェブレンがいうように、社会的に規定される「名声」を獲得することへと方向づけられるものだといわなければならないまい [cf. ヴェブレン, chap. 4]。社会に生きる存在としての人間の欲望は、直接的な快を享受する上では無駄に見える「顕示的 (conspicuous) な消費」によって「富と名声」という達成不可能なもの<sup>(8)</sup>を獲得するように導かれるのである。こうした指摘は、とりもなおさず、アダム・スミスがなしているものでもあった。「富と名声」を持つ者の扇動によって生起する「流行」は、先に見たように、エコノミーの欺瞞的な構造の中で「普遍的価値」と見なされ、人々の欲望を喚起するものとされていたのだ。同じ構造は、同じ構造は、ヴェブレンのいうような「有閑階級」の社会的地位が相対化された時代においても指摘することができるだろう。ガルブレイスが指摘するように、今日の「ゆたかな社会」における「ゆたかさ」の象徴的地位は、「宣伝と販売術」の競争の中で構築されるものと考えられるのである。

社会は高い生活水準を生み出す能力を高く買っているため、個人はその所有物を標準にして社会から評価される。社会の生産能力を強調する価値体系によって消費意欲はさらに助長される。生産が多くなるほど、体裁を保つために所有しなければならない物も多くなる。……宣伝と販売術の目的は欲望をつくり出すこと、すなわちそれまで存在しなかった欲望を生じさせることであるから、自立的に決定された欲望という観念とは全然相容れない。……実業家や一般の読者は、わかりきったことを私が強調するので、とまどわれるだろう。たしかにわかりきったこ

とだ。しかしこれは不思議なほど経済学者が反対してきたことなのである。経済学者は素人とはちがって、これらの関係の中に既存の観念をそこなうものがあることを感じていた。その結果彼らは、あらゆる経済現象のうちでも、いちばん厄介なこの近代的な欲望造出という現象から目をそむけていたのである。……こうしてそれ自体きまった欲望という観念は今でも生き残っている。近代宣伝術がどんなに盛んであろうとも、この観念はほとんど汚されずに教科書の中で支配している。[ガルブレイス, 202ff.]

個々人の欲望を所与とし、その一般均衡のエコノミーを構想する経済学は、「科学」としての理論的な純粋性を維持するために、人々の「欲望」がそれ自身「欲望」の関数である事実を目を塞ぎ続ける。「欲望は欲望を満足させる過程に依存する（＝依存効果（Dependence Effect）」[ガルブレイス, 207]というガルブレイスの指摘は、主流派経済学においては、なお「エコノミー」の外部からの警句以上の地位を得ていないのである。

### 流動選好とケインズ革命

それでは、人々の「欲望」は、どのような力によって方向付けられるのだろうか。商品自体がもつ「効用」とは独立に、人々に交換を促す力（＝「販売力」）を指摘した<sup>(9)</sup> ことにおいて、メンガーは、ケインズに先だって「貨幣選好」の存在を示した経済学者といえるかもしれない。

商品とは、そもそも、それがもつ「価値」がいかに大きくとも、その取引相手を見つけてはじめて交換されるといわなければなるまい。例えば、「剣」をつくる鍛冶屋が、自らの生産物を携えて市場におもむいたとしても、そうした比較的「販売力」の小さいものを欲する少ない人々の中から、さらに彼が望む食料や麻布をもつ人を直接見つけるのは困難である。実際、交換の規模の小さい原始的な市場においては、交換の成立は偶発的だといわなければならないのである。

それゆえ、「販売力」の小さい商品を携えて市場へ赴いた経済主体は、自らの生産物を直接的に彼の欲望を満たす商品と交換する前に、まずはより「販売力」の大きな商品と交換しようとすることになるだろう。「ホメロスの時代」には、そのような商品は「家畜」であったが、一定程度以上の規模の市場においては、それは「貨幣」として現れることになる。メンガーによれば、「貨幣」とは、他の商品に比べて著しく「販売力」の高い商品であると見なされるのである。

諸々の商品の間の円滑な交換を支える「貨幣」の「販売力」は、ここで、諸商品の「価値」または「効用」とは全く異なる次元に位置づけられている点に注意する必要がある。「価値」や「効用」は、「貨幣」を尺度としてその量によって測られるものであるが、その量の多寡にかかわらず「貨幣なるもの」は高い「販売力」を持ち、その「エコノミー」に参与する経済主体の優先的な交換の対象となるのである。

さて、そうだとするならば、古典派の経済学者が、セーの法則において想定していた「単なる交換の道具としての貨幣」という考え方は、多少なりとも揺るがされることになる。先にみたように、古典派が描く「エコノミー」においては、誰も貨幣それ自体を欲望しないことが想定され、その想定によってはじめて「生産は、それ自身によって販路を提供する」と主張することができたのである。だが、人々が「販売力」が高い商品を優先的に交換の対象とするならば、その「販売力」を頼って、「貨幣それ自体」を欲望する可能性が開けることになる。将来の「不確定性」が高い場合に人は「流動性」が高い商品を優先的に選好するというケインズの理論は、こうして、経済学にセーの法則を手放させることになるのだ。

厳密に言えば、セーの法則は、人々の「貯蓄」を考慮に入れたとしても成立するとみなされる。人々の貯蓄が、金融機関などを通じて資本市場へと流れるならば、貯蓄の増加は、自然的に利子率を下げて「投資」を増やし、結果として人々の間の勤勉＝産業の連関の構築に資するものとなるだろう。エコノミー内部での人々の間の「価値」の



分配は、仮に人々が貯蓄に走ったとしても果たされることになるのである [cf. 根井, 229]。しかしながら、セーの法則が描く経済体系においては、そのうちに貯蓄を組み入れてなお、人々の行動をエコノミーの再生産の観点からしか見ていないことに注意する必要がある。古典派のエコノミーにおいては、人々の貯蓄もまたすべて再生産へと接続されると想定されているのである。ケインズが指摘したのは、まさに、利子率を引き下げて投資を増加させると想定される古典派の「貯蓄」が、「貨幣それ自体」に対する人々の選好を考慮に入れていないということだったのである。

ケインズによれば、エコノミー全体の貨幣供給量に対して人々の「貨幣」に対する「流動性選好」が高い場合、すなわち、その流動性と安定性を評価され「貨幣」という商品を優先的に保持しようとする人々の傾向が高い場合、「貯蓄」へ向かう人々の行動は、古典派が期待するように利子率を下げることなく、相対的に高い水準に置くことになる。古典派経済学において想定された貯蓄による投資の増加は果たされず、反対に投資の滞りによって産業の再生産が阻害される可能性が描き出されることになるのである。そうした流動性選好は例えば、「エコノミーの未来」に対する見通しが悪く、人々が将来の「不確定性」に備えて自らの財を他の商品と交換しやすい状態に保持しようとするとき、顕著に現れるといえるだろう。経済的な不況が見込まれることで流動性資産への選好が高まり、結果として投資が滞って実際に経済が不況となる構造が描き出されるのである。

こうしてケインズは、経済不況時の政府の積極的な介入を奨励することになる。マクロ経済学の教科書として示されるように、公定歩合を引き下げて利子率を引き下げ、時には積極的に公共投資を行うことが、経済不況においてエコノミーの再生産を阻害する要因を排除する方法とされることになるのだ。今日の我々が直面する「不況」においても、基本的には同じ枠組みで対処がなされていることは、注記する必要もないだろう。

だが、今日の「不況」においては、一般に「流動性の罨」と語られる現象が発生し、ケインズの

予想を越えて流動選好が高まる状態が見出されることは確認しておく必要がある。

利子率がある水準にまで低下した後では、ほとんどすべての人が、きわめて低い率の利子しか生まない債権を保有するよりも現金の方を選好し、流動性選好が事実上絶対的となる可能性がある。この場合には、貨幣当局は利子率に対する効果的な支配力を失っているであろう。しかし、この極限的な場合は将来実際に重要になるかもしれないが、現在までのところでは私はその例を知らない。[Keynes, 204]

ゼロ金利政策と量的緩和が続けられながらも、なお将来に対する悲観の強さが利子率の低さを実質的な投資へと結びつけていけない場合、政府の金融政策は、ケインズがいうように、市場に対する実質的な支配力を失うことになるのである。

しかしながら、人はなぜ「貨幣」を選好するのだろうか。ケインズにおいて、利子率にだけ依存する関数として考えられる人々の流動性選好に対して、何らかの仕方で別様に「介入」する余地を考えることができれば、「流動性の罨」による制御不能なエコノミーの沈下を防ぐこともできるであろう。「流動性選好」と呼ばれる現象の構造をさらに立ち入って検討することは、それゆえ、「経済学」の立場から考えても、意味のないことではあるまい。

ケインズがいうように、人々が「貨幣」を選好するのは、それが「価値」であるからというよりも、その「安定性」と「流動性」を評価してのことだと考えられる。古典派経済学は、生産に関わる労働を価値の尺度とし、価値が「実体」として配分される構造を想定していたが、「貨幣」は、すべての商品に対する「尺度」として機能していたとしても、それ自体が「価値」の「実体」と見なされることはないように思われる。金本位制が廃止され、「実体的なもの」への観念的な結びつきも失われた後の「貨幣」は、エコノミー内部においてあらゆる商品の「価格」を規定するものでありながら、「価値そのもの」と取り違えられる

ことはないと考えられるのである。「貨幣」の機能とは、むしろ、岩井克人やアグリエッタ＝オルレアンがいうように、それが現に貨幣として流通しており、将来的にもそうであることが見込まれるという自己準拠的な構造に依拠してのみ語られうるものといえる [cf. 岩井, Aglietta/Orléan]。人々が「貨幣」に対して期待する「安定性」と「流動性」とは、そのかぎりにおいて、人々がそれを「貨幣」として受け取り、ほぼ無条件的に他の商品と交換してくれる期待に他ならないといえるのである。

しかし、それではなぜ、人は「貨幣」にそのような流動性を期待しうるのだろうか。「貨幣」がひとつの商品である以上、ひとがそれを受け取らない、あるいは条件つきで交換するという可能性は十分に存在する。歴史上我々が何度もその例を数えているハイパーインフレと呼ばれる現象は、人々が「貨幣」を無条件的に引き受けなくなった状況を示すよい例だといえる。しかし、そのように、「貨幣」がひとつの商品として現出し流動性に疑義が差し挟まれる可能性は、通常のエコノミーにおいては捨象されているといわなければならない。「貨幣」の無条件的な交換の機能は、まさにそうした可能性の捨象の上に成立しているのである。そうした可能性の捨象が実現するためには、しかし、「貨幣」に対する人々の欲望の存在が、意識的あるいは無意識的な仕方、エコノミーのうちに共有される必要があることになるだろう。人々が「貨幣」を欲望することが空間的時間的な広がりを持って「確信」されているからこそ、「貨幣」に対する選好が成立するのである。その限りにおいて、流動性に対する人々の選好もまた、人々の欲望の関数であるということが出来る。流動性選好とは、人々がそれを欲望することが一定の広がり期待されるものを欲望することに他ならないのである。

だとすれば、流動性に対する人々の選好は、「稀少性」による欲望の集中によって「価値」を現出させるエコノミーと同じ構造を共有するものだといえることになる。限界革命後のエコノミーにおいて見出される「価値」は、先にみたように、

人々の欲望の対象となることに基礎付けられたのである。このことは、ケインズが美人投票の例によって示していたことでもある。ケインズによれば、経済社会において長期的な成長を見込んで行われる投資は、「投票者が百枚の写真の中から最も容貌の美しい六人を選択し、その選択が投票者全体の平均的な好みに最も近かった者に賞品が与えられる新聞投票に見立てられる」[Keynes, 156]といわれていた。投票者の勝利は、そのとき、彼自身の選好の基準にしたがって投票することによって得られるよりもむしろ、他の投票者の好みに最もよく合うであろうと思うものに投票することによって得られるだろう [cf. *ibid.*]。エコノミーに参加する経済主体が、長期的な視点において利益を得たいと思うならば、彼は、独立して存在すると見なされる彼自身の欲望に従うもむしろ、他の諸々の経済主体たちの欲望を読み取り、その欲望を自らのものとすべきであることになるのである。エコノミーに参加する主体の欲望は、こうして、他の人々の欲望の関数として規定されることになるのだ。

特定の商品の「効用」に対する欲望の集中が、その商品の「価値」を引き上げ、エコノミーにおける再生産を駆動させるのに対して、特定の商品の流動性に対する選好は、流動性そのものを構造的に基礎づけながら、再生産を阻害する要因ともなる。エコノミーにおける作用の仕方は異なるものの、両者はともに欲望の関数として規定される。今日の我々の社会における「エコノミー」とは、すなわち、意識的あるいは無意識的な人々の欲望の構造として示されるものであるのである。「経済」を規定する人々の欲望は、それでは、実際、どのようにして規定されるのだろうか。「欲望のエコノミー」と呼ぶべきものの構造を明らかにする作業が必要とされることになるが、すでに紙幅が尽きてしまった。本論では、まずは「経済学」が前提にしている「エコノミー」の構造を明らかにしたところで筆を擱くことにしたい。

本文中に参照した文献の略号は次の通り。

[Aglietta/Orléan] Aglietta et Orléan, *La Monnaie*

*entre violence et confiance*, Odile Jacob, 2002

[kaken] 麻生博之, 荒谷大輔, 佐々木雄大, 鈴木康則, 三重野清顕編「『エコノミー』概念 原典資料集」(科学研究費基盤研究(B)『エコノミー概念の倫理思想史的研究』(代表: 麻生博之) 研究成果報告書・補足論集) 二〇一〇

[Keynes] J. M. Keynes, *The General Theory of Employment Interest and Money*, London: Macmillan, 1951

[Menger: GV] C. Menger, *Grundsätze der volkswirtschaftslehre*, Verlag Wirtschaft und Firarzen, 1990

[Say] Jean-Baptiste Say, *Traité d'économie politique*, Economica, Paris, 2006

[Sismondi] J.-C.-L. Simonde de Sismondi, *Nouveau principe d'économie politique*, Paris, 1819 / 菅間正朔訳『新経済学原理』日本評論社, 1945

[Smith: TMS] Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, edited by D. D. Raphael and A. L. Macfie, Clarendon Press, Oxford, 1976

[Smith: WN] Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Edited by R. H. Campbell and A. S. Skinner, vol. I, II, Oxford University Press, 1976

[Walras] Léon Walras, *Éléments d'économie politique pure*, R. Pichon et R. Durand-Auzias, 1926 / 手塚壽郎訳『純粹経済学要論』岩波書店, 一九五三

[岩井] 岩井克人『貨幣論』ちくま学芸文庫, 一九九八

[ヴェブレン] T・ヴェブレン著, 小原敦士訳『有閑階級の理論』岩波文庫, 一九六一

[ガルブレイス] ガルブレイス著, 鈴木哲太郎訳『ゆたかな社会』岩波書店, 二〇〇六

[シュンペーター] J・A・シュンペーター『経済分析の歴史』岩波書店, 二〇〇五～二〇〇六

[中宮] 中宮光隆『シスモンディ経済学研究』三嶺書房, 一九九七

[根井] 根井雅弘『入門 経済学の歴史』筑摩書房, 二〇一〇

[ハイエク] F・A・ハイエク著, 田中訳『市場・知識・自由』ミネルヴァ書房, 一九八六

[ホランダー] T・ホランダー著, 菱山泉ほか訳『リ

カードの経済学』日本経済評論社, 一九九八

[リカード] リカード著, 竹内謙二訳『経済学と課税の原理』東京大学出版会, 一九七三

[吉田] 吉田静一『異端の経済学者: シスモンディ』新評論, 一九七四

# 《註》

(1) [Smith: TMS, IV.1.10]

(2) 通常の邦訳では, これは, 「諸国民の富の性質と原因についての研究」と訳される (nations をどのように訳すかについては議論があるがここでは立ち入らない)。だが, nature を「性質」と訳せば, 日本語によるその語のニュアンスによって, 「富」の様々な性質が, 「富」の「原因」と並んで, ここで問題とされているように印象づけられる。しかし, cause が無冠詞複数であるのに対して, nature は冠詞付単数であり, スミスによって問われている事柄が, 「富」についての, 可算的な「性質」ではないことは明らかであるだろう。スミスはこのタイトルを付けるにあたって, 富の「原因」は様々であるが, その「自然=本性」は唯一なもの (the nature) として意識しているのである。

(3) 「セーは産出量の増大が利潤率を圧迫することを考慮していた。リカードにとって不満だったのは, この見解が販路法則〔セーの法則〕に矛盾するということをセーが理解できなかったことである。実際セーは, 戦後恐慌は長期停滞の諸特徴を反映しているという主張さえしていたのである」[ホランダー, 738]。

(4) シスモンディは, 経済学史において, セー=リカードの「正当派経済学」に対する「異端の経済学者」とみなされる (cf. [吉田] [中宮, 7f.]) が, 回顧的な視点から, ケインズの経済学の先駆者として位置づけようとする向きもある。

(5) [ハイエク, 179]

(6) [シュンペーター]

(7) [Walras, 119/201]

(8) 「この闘争は本質的には上下の比較を基礎とする名声のための競争であるから, 決定的な目的達成の解決は不可能である」[ヴェブレン, 37]。

(9) cf. [Menger: GV, 221]